



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

53

國家圖書館出版社





國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

53

國家圖書館出版社

第五三冊目錄

昭和十年（一九三五）旅行日誌（第三十二期生）

岡本勇 室屋光義 濟木健次

面寬仁 田代正文 西山進 平田正三

竹內信夫 小森朴郎 平井透

橋口兵一 村井和夫 鶴谷正雄

昭和十三年（一九三八）旅行日誌（第三十五期生）

荻下利明 渡邊健治

横尾幸隆 本土敏夫 田浦正成

細川正直 細萱元四郎

内坂旌旗 上野善臣 望月今朝男 小川弘一

新行内義兄 八木友愛

今里明 濱田守保

第十六卷 一

第十七卷 九一

第十九卷 一七一

第二十卷 二五九

華北第一班 三三一

華北第二班 三四三

華北第三班 三六五

華北第四班 三七五

華北第五班 三九一

華北第六班 四〇一

松村甫	吉田健二	華中第二班	四一三
翠田實	田村忠 河合一男	華中第三班	四三五
谷本誠	岡田米作 松本達雄	華中第四班	四四三
井上喜三郎	小林安正 戸部茂	華中第五班	四五九
西本禮三	穴澤健二	華中第六班	四八七
山口左熊	佐藤照勝 玉井三郎	華中第七班	四九九
小泉清一	橋口正行 村田久雄	華中第八班	五三九
高瀬鐵雄	小谷稔 佐野三治郎	華中第九班	五六五
佐原元一	原田豐作 馬場隆	華中第十班	五八一
河野武彦	鴉田藤太郎 簡昆田	華中第十二班	六一九
秦省吾	小野莊太郎	華中第十三班	六三五

第十六班

山西省調查日誌

岡本 勇

魚屋 光義

濟木 健次

昭和十年一月第三十二期生第三十九回調査報告書
第十七卷 山西省調査旅行日誌。

第十六班經過地

上海—漢口—鄭州—洛陽—潼關—西安—潼關—
—蒲州—運城—臨汾—太原—大同—綏遠—大同—
—張家口—北平—天津—山海關—奉天—新京—上海、

五 唐 園

六 月 五 日

日一七日。

入 息 我 々 も大旅行に旅立つことになった。そして上海を出發
 した。六月五日の早朝であつた。旅立つ前に我々は院長の
 近く社會にある諸君にとつて唯一のそして重大な準備である。
 身体に氣を^{付けて}目的を果して来いとの訓辭と、三年間支
 那に目を向けて来た知識階級が支那内地を旅行するのだ。日本人
 にして~~如~~條件にあるものの何人か行けるかと云ふことに思を~~燃~~せて
 元分責任を感じて貰ふたいとの小竹教授の激勵の辞を受け、又
 先輩の方から旅行に就くの注意を聞いたのであつた。
 として教授並に學生諸君から親兄弟の様な氣持で書院を送り出
 され、浦東まで行き、小竹先生と佐藤君、折橋君、それと
 我々三人のために福興印刷所の佐藤君が見送つて下さる。其
 のであつた。かくて我々は制し得ざる嬉しさの中にも緊張したの

であつた。

五、六、七、八日の夕方迄鳳陽札の旅、揚子江の旅は至つての長閑なものであつた。水辺には柳が茂り、牧童は水牛を追ふ。

何時洗ひ流されるかも知れない土地を渡すのに余念の無い百姓を見て、彼等の忍耐、無言の抵抗が空しく感ぜられた。

船の上には一杯にボーイが来り、之を乗客よりも慕はる。彼等の

方が多い位であつた。朝起きる時、食事時は二度も三度もうるさい

位起しに来、呼びに来るのであつた。顔事ふめし、今もまだはつきり覚え

食事は何時も支那料理であつた。はじめは塩や漬物を盛に要

求してゐたのが、段々慣れて大に食ふ様になつた。

二日、三日と暫かな旅のつれぐに花牌が持ち出された。かくして必

ずの際、緊張は何處へやら段々ヒ氣分はたれて来るのであつた。

最後の揚子江を渡り、船は漢江に近づいて行く。

漢口

六月八日。

午後九時頃入港と豫定せられた日清汽船の鳳陽丸が漢口の碼頭に着いたのは七時過ぎであつた。先輩の方々に迎へられて、船の上で注意を受けける。着船の都合で歓迎會も明日に延期し、又入港が急に早くなつたので知らぬ人が多く、出迎の人も少なかつたこと。それが宿所の件も先輩のお宅に分宿して貰ふことになつてゐるとのこと。九江で受取つた漢口の乾事のオカからの手紙では、江漢中隊は試験中で駄目だし、日本人旅館の紹介がしてあつた位だつたので、實際難しかつた。早速宿所の割当てと、明日の見學の豫定表とを分配された。我々の班三名は十七期の山崎氏の所にお世話になることになつてゐた。長野縣と書いてあつた。暫くして、愈に上陸と云ふ段になつたが、船に一泊しようなんて考へてゐた程だったので、毛布の荷造に時間を費して、一行に渡

れて、上陸第一歩ちと迷った。日本人に聞いて、貰ったばかりの住所を目あてに洋車に乗る。漢口にも又独特の支那語の調子があるらしい。しばらく行くと出迎への一人が引き返へれて来て下すった。何をしておたんだとて赤面する。

漢口のバンドは上海のバンドによく似てゐる。揚子江も此處まで上つて来ると大分河幅も狭くなつて、黄浦江と大差ない。バンドには大きな建物が並んでゐる。江上には大きくこそないが汽船も軍艦も浮んでゐる。上海のバンドを小さくしたと思へばよい。でも漢口のバンドは上海のバンドがしながない。電車も無ければバスも無い。自動車も無い。とても静かである。道行く人もものんびりしてゐる様な気がする。

並木のあるバンドに沿って各国の旧租界が並んでゐる。しかし大部分が回收されて、現在は日佛兩租界のみである。

日本租界内に入つて、浴衣がけで散歩してゐる日本人を見ると、上海などよりはずつと日本らしく思はれた。青島を思ひ出す。在留邦人は千三百人ださうだが、一見それ以上ゐる様に思はれた。山崎氏のお宅は、家族の方は内地に歸つてゐられるさうで、お一人であつた。風呂に入つて、~~僕~~でもでから、おそくまで話をする。海外に於^{いて}は、子供の健康や教育に不利なことを述べてお^もうされた。漢口は~~まだ~~暑^い。夜になつても無風状態で、十二頃でも依然として暑い。でも暑さのために真夏になると蚊^がおなくなるだけにはよいさうである。

氏はスポーツマンださうだ。何でもうまいらしい。所謂運動神経が發達してゐるのだらう。ゴルフ、水泳、剣道なんでも来^てである。上海でプールを作るとか、の問題を新聞で見たと、山崎氏のお話から、上海の体協の無力さが話題に上る。それに反し、漢口の

体協はとも門満に行つてゐるさうである。上に立つ人が皆スポーツをやつたことのある人だからださうだから。ちやうどまじしく思つた。卒業したる漢口に来やうかなんておひかすのであつた。

船の癌を癒すべく上床に就いたのは十二時前であつた。

六月九日。

明くればれ日、暑いにもかかはず、旅の癌は夜が明けても夢の中から容易に離れて呉れない。

朝食は久しぶりに味噌汁で、之に元氣をつけて、昨日世貰つた予定表の時刻に遅れじと、バンドの三菱公司の明田氏のお宅前に出で。昨日の失敗を繰り返す様にと話しながら。

相前後して定刻迄には皆集る。門田氏の案内で、長井渡兩駐在武官のお宅を訪ね、引續き總領事館に行く。總領事館はバンドに面し道路をはさんで門田氏の住宅と相對してゐる。

總領事館では副領事が挨拶を受けられた。其處を辞してから、国井(22)磯西(22)兩先輩の案内で、日清汽船の好意に依つて、ランケで武昌に向ふ。ランケが出ると門田さんが子供達と見送つて下さつた。ランケはバンドに沿つて揚子江を上つて行く。汽船が無数に碇泊してゐる。途中我が船が昨日乗つて来た鳳陽れも目に付いた。怡和をはじめ、知の字のついた名前の船が三つもある。WOと發音するものと知つた。

漢口は漢水を距て漢陽と、揚子江を距て武昌と相對してゐる。ランケは帆船の一杯浮んでゐる漢水を過ぎ、漢陽の清泉閣の手前から左に折れて、前方に黃鶴樓を見て、武昌に向つて揚子江を横切りはいれた。清泉閣は北伐の時、蒋介石が奮戦した所ださうである。漢水に近、漢口、漢陽の揚子江沿には、銀行洋行其の他の倉庫が多く並んでゐる。

武昌に渡ると、黄鹤樓のトに掲不板があつて、新生活運動が特に目
に着いた。其の一つには次の様なものがあつた。

不要奇装異服

不要燙髮束胸

不要穿高跟鞋

莫染不良嗜好

娛樂要有節制

行路莫要輕佻

黄鹤樓に上ると黄鹤樓古跡と書いてある。一つならず三つ位は塔が
ある。皆寫真屋と飲食店に変わつてしまつてゐる。此處に上つて、武昌
と漢口と漢陽を見下せば、果然三つを比較してみたいくなる。一口に云へば、
武昌は政治、漢口は經濟の中心都市である。漢陽は工業都市であ
ると思つてゐたが、近年は何等見るべきものはなく、亡び行く町である。
先輩の方も、此處から見て中々様々に大した所でもないから見學は
止めにしたと云つてあつた。黄鹤樓には有名な唐の詩人李白の詩がある。

故人西辞黄鹤樓
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空盡
惟見長江天際流